

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心 No.1642

利益と損失、ほまれとせしり、
非難と称讃、楽しみと苦しみ
— これらのことがらは人間に
おいては無常であつて、恒久な
らず、変滅するものである。
(釈迦)

△解説▽利益や誉れ称讃や楽しみ
は歓迎すべきで、その逆は避けたい。
人として当然の気持ちだ。しかし、
無常であるからにはいつも思い通り
にいかない。と同時に無常だからこ
そ、見方の転換と努力で理想の達成
も可能になる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.19 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1641

高原陸地に蓮華生ぜず、卑湿
汚泥にこの花を生ず。
(『維摩経』)

△解説▽高原や陸地の乾いた場所
では蓮華は育たない。土地が低くて
じめじめしている泥に生じる。迷
いや煩惱の世界だから悟りもある。迷
いや煩惱を避けて別世界を求めるの
は間違ひ。苦しみ、気づき、転換し
た時に新しい世界が生じる。ただ、
泥と蓮華は同じではない。煩惱はそ
のまま悟りではない点も注意。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.18 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1644

寒時には閻梨を寒殺し、熱時
には閻梨を熱殺す。
(『碧巖録』)

△解説▽暑さや寒さのないところ
はない。そこで言う。寒い時は寒さ
に徹し、暑い時は暑さに徹するべき
だと。「閻梨」は「高僧」だが、こ
こでは「あなた」の意味。老病死の
苦への対処も同じ、別世界はない。
その中で苦しめない老病死の生き
方を求めたい。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.21 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1643

やがては腐敗して朽ちてしま
うわたくしのこの肉体をみた
とて、なんになりましょう。ものご
との理法(ダルマ)を見る人は、
わたくしを見るのです。(釈迦)

△解説▽ある仏弟子が師匠に会い
に行きたいと思っていた。その弟子
に釈迦は言う。法を見る者、つまり、
真実(真実を述べた教え)を知って
実践することが、実は私に会って
ることだ、横にいても法を見ない人
は、私を見ていないと。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.20 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1646

戒めは一切の善なる精神作用が、これにおいて確立することを特質とします。

（『ヒリンドラ王の問』）

△解説▽よき行いを何度も繰り返すことで、自分のなかで習慣化して力となっていくのが戒めである。力となつて自らの生き方そのものになつたとき、そこから外れた行為はできなくなる。戒めはガードレールのようなもの、道をそれたり崖に落ちたりすることから防いでくれる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 6. 23 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1645

布施の心とは、すべての者たちに布施の心を向けることである。△身体による施し▽△言葉による施し▽△意による施し▽△財物による施し▽△真理の教えの施し▽をいう。（『梵網経』）

△解説▽布施とは広く与えること。慈しみの心があれば、形はさまざま。物を与えるだけでなく、優しいまなざしも、優しいことばも布施になる。迷う人へのアドバイスも布施になる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 6. 22 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1648

少くして学べば、則ち壮にして為すあり。壮にして学べば、則ち老ゆとも衰えず。老いて学べば、則ち死すとも朽ちず。

（『言志晩録』）

△解説▽少年の時に学んでおけば、壮年になつて役に立つ。壮年で学んでおけば、老年になつても気力は衰えない。さらに、老いても学ぶならば、判断や経験は社会に貢献するため、死んでも名が朽ちはしない。学問に卒業はない、理想的な学び方。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 6. 25 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1647

如来の滅後に、教えを書きとめ、読誦し、供養し、他人のために説き広めるならば、如来はその衣でこの者を包まれ、また、他の世界の仏たちもこの者を心から守護される。（『法華経』）

△解説▽教えを自らのものとし、他の人のためにも残し、伝え続けていくとき、教えの実践は強い力となつて、人を護ってくれるはず。それは仏の衣に包まれて守護されているようなものである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 6. 24 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心 No.1650

「理想的ではない」布施がある。しつこくされ布施をする。恐怖に駆られて布施をする。恩返しのための布施をする。返礼を期待して布施をする。

〔等誦経〕

△解説▽他の例として、習慣や先例からの布施。義務とする布施。食のある私がない人に与えないのはよくないと「他と比べて」布施する。良い評判を期待しての布施。これも、悪くはないが、理想的でないという。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.27 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1649

学ばに暇あらずと謂う者は、暇ありと雖も亦学ば能わざるなり。

（『淮南子』）

△解説▽学ぶ時間がないという人は、たとえ時間があってもなかなか学ぶことができない人である。仕事や勉強など時間がないからできないというが、実際はどうであろう。暇になったときにその仕事や勉強をするだろうか。忙しい人ほど引き受けた仕事は確実にこなすとも聞く。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.26 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1652

三つのものを離れたならば、身体は捨てられたのだと観ぜよ。その三つとは、寿命と体温と識別作用とである。（釈迦）

△解説▽人の死を説明している。さらに、身体は捨てられ横たわり、精神ないものとなり、他者の食物になるという。これは私たちに堅固な実体はなく、たえず変化するものだと、そうした認識を求め、実相を見て執着を取り払う言葉である。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.29 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1651

財産や品物が無くてもできる功德ある七種類の布施がある。「すなわち、それは以下のとおりである」

（『雜宝蔵経』）

△解説▽やさしいまなざし。嫌な顔をせず穏やかな楽しい顔つき。思いやりで満ちた言葉。立って行って迎えたりあいさつしたりする。思いやりのある心遣い。座席を与える。家に招き入れ歓待し、あるいは泊めてあげる。これらは「無財の七施」と呼ばれる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.28 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心 No.1653

ことばで表現されたものを「真実である」と考えている人々は、ことばの「領域の」うちに安住し「執着し」ている。

（釈迦）

△解説▽ことばで表現されるものを固定的に見て、いつまでも変わらないかのごとく見てしまふ。しかし、本質を見抜き、変化し消滅する無常性を知り、執着を生じさせないことが大事。それで死にとりつかれなく（死を苦しみにすることなく）いら

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.30 中村元記念館協力